

宮澤賢治 妹の死

—臨終詩編の考察・注解—

目次

- 一、親しい人の死—「二人称の死」のもつ意味
 - 二、伝記の面から
 - (一) トシの病氣—賢治自らの病氣
 - (二) トシの信仰
 - (三) トシの死
 - 三、臨終詩編に即して
 - (一) 「永訣の朝」
 - (二) 「松の針」
 - (三) 「無声慟哭」
- 〈参考〉トシの形象化をめぐる

黒澤 勉

一、親しい人の死―「二人称の死」のもつ意味

愛する者を喪う―その悲しみを味わう、ということとは、私達の人生において避けられないことである。それは時に、一時の悲しみにとどまらない、きわめて辛い過酷な試練ともなる。それを避けるためには自分が先に死んでしまいか、あるいは誰も愛さなければよい。しかし、自分が死ねば、この自分を愛している人に大きな悲しみを与えることになる。それに自分が死ぬなどということは、考えたくもない、嫌なことである。私達は生きていて、生きていく限り、どこまでも生き続けたい。それが本能であろう。

誰も愛さなければ悲しくない。悲しみの深さは愛の深さであり、悲しむことのない人は愛することのない人であろう。わけても死別は人生における大きな悲しみであり、その悲しみを通して、自分がどれほど、その人を愛していたかを知ること多い。

私達は死について多くの情報をもっている。毎日のように戦争や交通事故、殺人などによる死の報道があり、死亡広告によって、この人、あの人が死んだということが知らされている。しかし私達は多くの場合、その報道によって深い悲しみを体験するわけではない。それらは他人の死、第三者の死（「三人称の死」と呼ばれている）だからである。第三者の死でも、それらの人々について関心をもち、想像力を働かせて、生き生きとそれらの人々を思い描くようになると（小説を読む時、このようなことを経験している）親しい者の死に近い形で受け止めるようになる。

だが、何といっても私達がこの人生で体験する大きな悲しみは親しい人の死（「二人称の死」と呼ばれる）である。

祖父母や父、母の死、兄弟姉妹、伴侶である夫や妻の死、わが子の死、あるいは親しい友人、恋人の死……私達はそれらの死を体験し、心の深いところでその悲しみを味わって、成長し、古い、病み、やがては自らの死に直面する。親しい人の死を通して自らの生への自覚を深め、それが残された生をかけがえないものとして大切にしようという意識を高めることも多い。

平山正美はこの点について次のように述べている。

「いったん病気や死との出会いを通して悲しみを味わった人は、生命の尊さを自覚すると同時に人間には限界があること、時間が貴重なこと、人と人との出会いが素晴らしいものであることを肌で感ずる。そして、それまでは勝手に生きていたのに、死と再生の経験を通して自分が生かされた存在であることを悟るようになる。つまりこのよきな体験は人格の成熟と真の意味での自己実現を達成させるために重要な役割を果たすのである」(『身近な死の経験に学ぶ』春秋社刊)

宮澤^(注)賢治にとって妹、トシ(戸籍上は片仮名書きの「トシ」だが、賢治は書簡の中では「とし」「とし子」と表記、臨終詩編においては「とし子」と書いている)の喪失体験はまさにこの一典型であった。私達も賢治の作品を読むことによって間接的にその悲しみを共有し、自らの魂を高める「死の教育」の重要な素材とすることができ。その理由として次のことがあげられる。

第一に、トシを喪ったことは賢治にとって絶望的といえるほどの深い、大きな悲しみの体験であった。このように絶望的なほどの悲しみの深さを体験している者でなければ、良い素材とはなりえないだろう。

第二に、その喪失の悲しみを、賢治は見事なまでに逆転して自らの再生の契機とした。その意味でもすぐれた素材である。喪失の悲しみに沈んで、立ち上がることのできないものは、素材となりえない。死の教育の素材とは生

きる力を人々に与えるものでなければならぬからである。

第三に、悲しみから再生に至るプロセスを賢治はこの上なく美しく、深い言葉で表現している。その表現力の豊かさは、深層心理的、宗教的な感覚の深さともつながっており、私達の意識を「より大なるもの」の目覚めへと促す。死の悲しみについて型通りの類型的な表現ですませ、私たちの実存の目覚めへと促す体験が「通念」で片づけられがちな日本の社会にあつて、賢治の作品は徹底的に己れ自身の言葉を通して語られている。私達は、そのきわめて個性的で独自の思索、表現に触れて、死や生のもつ意味を情緒的にまた、宗教的に感じとることができる。

(注)「宮澤」とするか「宮沢」とするか。戸籍上は「宮澤」だが、現在「宮沢」の表記の方が多い。賢治自身は両方の表記を使っている。本文では戸籍上の表記としたが、書名等で「宮沢」となっている場合は、それに従った。

二、伝記の面から

(一) トシの病気―賢治自らの病気

宮澤トシは賢治の二歳下の妹で（この他に妹、弟として五歳下のシゲ、八歳下の清六、十一歳下のクニがいる）小学校六年間ずっと全甲を通し、県立花巻高等女学校でも首席を通すという才媛であった。一九一五（大正四）年、女学校を卒業すると日本女子大学家政部に入学、責善寮という寮に入り学生生活を送っていた。

ところが、一九一八（大正七）年十二月二十六日、原因不明の高熱を発し、東京帝大付属病院小石川病院に入院

した。二十一歳、卒業まであと三ヶ月余りという時である。

一方、賢治はこの年三月、高等農林本科を卒業、続いて「地質・土壌・肥料」を研究テーマとする研究生として残り、稗貫郡から依頼された土性調査のため実地踏査にうち込んだ。七月下旬、盛岡での生活を切りあげて帰花している。それに先立って六月末、岩手病院で診察を受けたところ、肋膜炎と診断された。「私は先日、肋膜炎がどうも具合悪くなりそうだから山歩きを止めろといふ医者勧めと父が病氣な為により、学校へはもう行かないことに決めました。けれどもとにかく予定の地質調査はするつもりでゐます」と同年七月二十五日付書簡で近況を阪嘉内に報告している。続いて「これからさきとても私には労働らしいことはできません。一昨日等も歩きながら胸が苦しくて仕方なかったのです」と胸の苦しみを訴えている。それから約四ヶ月後のトシの発病の知らせであった。

トシ発病の知らせを聞いた賢治は、母イチを伴ってただちに上京。十二月二十七日から翌年二月六日まで小石川区雑司ヶ谷にあった雲台館に投宿する。トシの入院していた永楽病院まで徒歩で三分という近くにあった下宿屋である。賢治は在京、四十一日の間に、毎日、トシの看病に通い、事細やかに病状を父に報告、計四十五通の書簡(ほぼ毎日、時には一日二通の書簡)を父に宛てている。その記述も、たとえば「朝三十八度二分、夜三十九度、脈膊九〇〜一一〇、呼吸十八、二十位」(十二月三十日付書簡)などと具体的な症状を詳細に伝えている。入院当初はチフス菌が疑われたが、「腸チフスに非る事は明に相成り候、依て熱の来る所は割合に頑固なる(医師は悪性なると申し候へども単に長時を要する意味に御座候)インフルエンザ及肺炎の湿潤(加多兎に至らざる軽異常)によるものにて今後心配なる事は肺炎を併発せざるやに御座候由」(大正八年一月四日、ルビは筆者。以下同じ)ということだった。続いて「八日夜は三十八度九日午後三十八度六分に御座候へども右は多分結核試験によるもの^{これある}に有之

べく但し結核の反応は無之候間御安心くだされたく「下度候」(大正八年一月十日)と報告は続いている。幸いにしてトシは病状が回復するがその四年後、再び病いに倒れる。結核であった。トシのこの東京在住時代の病氣も明らかに結核によるものであろう。

こうした経緯は賢治自身の病歴ときわめて似通っていることに気づく。十八歳で鼻の手術のために入院したが原因不明―腸チフスカと疑われる熱が続いて入院が長引いたこともそうである。また、前述したように、トシ発病の前に肋膜炎と診断され結核の不安を抱き、自らの短命を予測したりしているのである。賢治はトシを献身的に看病しながら、同じ病いを生きる者として、そこに自らを重ねてみることもあったのではあるまいか。

賢治の甥にあたる宮沢淳郎の『伯父は賢治』によると、母イチは結核に感染していたのではないか、イチの(その人柄からいって考えられない)喫煙の習慣は、タバコを吸うと人に感染しないという当時の迷信によるものではないか、と推測している。肉親の手になる貴重な証言であり、イチが結核であった可能性は高いと思われる。同書では、賢治とトシが同じ病気でつながっていること、そして賢治がきわめてせっかちに、急ぎ足に生きたのは、トシの死が重要な契機となり、自らも決して長く生きられないだろうという思いが、その性急さにつながっていたのではないかと推測している。傾聴に値する見解であろう。

(二) トシの信仰―信仰の同志

「無声慟哭」の中に「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが／あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて」という一節がある。賢治にとってトシの存在は「わたくしのいもうと」―血でつながる

兄妹、そして前述のような同じ病いを生きる兄妹というばかりでなく、信仰の同志であった。この一節は賢治が同志を失ったという形でなく、妹の側から「みちづれ」である私に賢治という形で捉えられ、妹の目からみた自分、その自分がどう生きているのか、という内省につながっているが(注二)、賢治からみても妹はかけがえのない「みちづれ」であり、その「みちづれ」を失った悲しみは大きかった。保阪嘉内に「わが友嘉内、我を捨てるな」と執拗なまでに法華経信仰を迫った賢治である。同じ道を歩む同志を求める思いは切実なものがあった。しかし、現実とその生涯において何人の同志に会えたであろうかと考えてみる時、結局はただの一人も会えなかったようだ。「友一人なく」の思いは法華の信仰に燃える賢治の生涯を貫く寂しさであった。

トシと賢治は精神的な双生児といってよいほど似通った兄妹であった。求道精神の強さ(注三)、宗教的な内省心の深さ、自罰的な傾向、他者に対する心の優しさ、衆にぬきん出た明晰な頭脳……もしトシが若くして死ぬことがなければ、賢治の生涯あるいはその作品はかなり異なったものになったであろう。トシを喪った悲しみの深さは、臨終詩編や挽歌などの詩作品のみならず、「銀河鉄道の夜」のような童話にまで大きな影を落とす、しかもそれらがまた作品創造という次元にとどまらない、自らの人生を築いていく原点ともなっているようにさえ思われるのである。

ここではトシの信仰、思想を知る一つの手がかりとして一九一七(大正六)年六月二十三日付の祖父喜助宛書簡を紹介しておく。日本女子大学三年、十九歳の時のものである。

「人はどうせ一度は死ぬべきものに御座候 私もいつ死ぬものか少しも先きはわからず候

先きに死ぬとあとに死ぬとの區別こそ為れ、死なぬ人は一人も御座なく候 人の世はたかが五十年七十年その間に喜んだり悲しんだり致し候ても一寸の間の夢の様なるものかと思はれ候 その短き間の事のみ人は熱心に何のかのと立騒ぎて候ても死んだる後この自分がいかになるかを考ふる人の少きは誠に間違ひたる事と存じ候 人は怒つ

たり喜んだり悲しんだり苦しんだりするのつまりは自分と云ふものをもとにして考へ居る事に候 他人が自分に
よくして呉れぬとか氣に入らぬとか云ふのも皆この自分を庇ひ自分の為を思ふ心よりする事と考へられ候 自分が
立派な人と云はれたい、よい目にあひたいと云ふのもこれと同じ事に候 かくまで自分を可愛がり居るものが此の
世の命を終へると共に自分と云ふものが全くなくなり消えてしまふものと云ふ事を御祖父様はほんとうだと思ひ
遊ばす事出来申し候や 私は出来申さず候、どうしても人の身体はなくなり候ても自分の魂はいつまでもあるもの
と私は信じ居り候 そんならバ如何にして死後の世界に私共が居るかと云ふ事を考へし時は、全く居ても立つても
居られぬ苦しき思ひが致され候 仏様は因果応報を御説きなされ候とか伺ひ居り候、善き事したる者は死んだ後に
よき報を受け、悪しき事をなせる者は悪い報を受けて苦しまなければならぬ。と云ふ事を教へられ居り候 それな
ら私はこの世に於てよい事のみをなしたるか、よくよく今までの私のしたる事を考へ候時、どうしても恐ろしく
てたまり申さず候、朝おきるより夜ねるまで一つとしてよき事はなさず候 人を不足に思ひ、人を憎み、うらみ、
怒り、又たまたまよき事をしたる様に見えても実はその考へは自分をもとにして立てたる事故、つきつめれば、他
人をおしのけても…と云ふ考へと同じ事に候 かかる考へはとりもなおさず地獄にしか行き所のなき悪い事この上
もなき私と云ふ事に成り候 (後略)

この書簡は祖父に宛てたものであるが、こうした宗教的問題について、トシは賢治とつきつめて語りあっていた
のではなからうか。賢治が家の信仰である浄土真宗 (単なる檀家というのではなく熱心な信仰が家族の中に生きて
いた) を厳しく論難して父と争い続けていること、それは兄思い、家族思いのトシにとっても大きな課題だったは
ずである。トシが賢治の「みちづれ」になった、それを選びとったということは、重要な意味をもつ一種の思想的
決断だったのではなからうか。

この書簡の中でトシは魂の不滅、死後の世界があるということ固く信じていると述べている。そして、自分が死後どのような世界にいくかを考える時、利己的で罪深い自分は地獄にしかいきようがないと考え、そこに大きな恐怖・不安を感じていると述べている。トシの信仰の決断―改宗の決断は、この恐怖・不安に回答を与える賢治の信仰と深く結びついているのではなからうか。

まだ元気であったころのトシが死後の世界に対してこれほどの恐怖・不安を感じていたのである。病いによって死に直面した時、この問題は自らの深刻な課題となったのではなからうか。それは同時に、「みちづれ」に導いた賢治自身に発せられた問いにもなったはずである。肉体的に苦しむだけでなく、精神的にこうした恐怖・不安を抱いているトシをいかに安らかに、安心のうちに旅立たせるか―トシの死はまさに賢治の信仰の試金石となって迫ってきた重大な課題だったのではなからうか。臨終詩篇が喪失体験の悲しみに終わらず、さらに又、翌年のオホーツク挽歌として執拗なまでにこだわり続け、そこから離れられなかったのは、それが自らの信仰・生き方への内省を迫るものだったからだと思われる。

(注一) トシがいかに自らの思想、信仰を求める求道的な女性であったか、ということについて、また、日本女子大学在学時代、校長の成瀬仁蔵や、メーテルリンク、タゴールなどの感化を受け、それが賢治にも大きな影響を与えたこと、「賢治の前を歩んだ」女性であったということについて『宮沢賢治妹トシの拓いた道』（山根知子、朝文社、二〇〇三年刊）に詳しい。

(注二) 『伯父は賢治』（宮沢淳郎、八重岳書房、一九八九年刊）の中に、トシの自省録が紹介されており、その一節に次のようにある。「此の四五年私にとって一番根本な私の生活のバネとなったものは『信仰を求める』と云ふ事であった。信仰によって私は自己を統一し安立を得やうと企てた。信仰を得るほど人生に重大な意義のある事はないと思はれた」大正九年二月九日の記述である。

(三) トシの死

一九一九(大正八)年三月、賢治や母の献身的な介護を受けて病状の回復をみたトシは永楽病院を退院して花巻に帰った。卒業証書はわざわざ東京から寮監が持参して届けられ、しばらく自宅で療養し、体力も回復したので、九月二十四日、母校の花巻女学校の教諭として英語を担当した。

しかし、一九二一(大正十)年九月、咯血があったため十二日付で同校を退職した。賢治はこの時、父との信仰の対立―法華経への一家の改宗の願いが受け入れられないことから、無断で上京、東京大学前の文信社という小さな出版社で校正やガリ版切りなどしながら収入を得て、国柱会の奉仕活動をしていた。国柱会の高知尾耀の言葉に示唆を受け、「法華文学ノ創作」を志したことは、著述家としての賢治の誕生といってよいほど重大な出来事であった。上京中の書簡に「さあ、ここで種を撒きませぬ。今の仕事(出版校正、著述)からは、どんな目にあってもはなれませぬ」(大正十年一月三十日付、関徳弥宛書簡)とあるのは、東京にあって経済的な自立の道を選び、著述の道に志したことが、なみなみならぬ決意であったことを物語っている。

それから半年余りして八月中旬、トシ咯血のため「スグカエレ」の電報によって賢治の東京での生活は終止符を打たれた。

トシは自宅で療養につとめていたが、病人の安静のため一九二二(大正十一)年七月、宮澤家の別宅である下根子に移り、賢治が専心、看護に務めた。しかし、病状はなお悪化の道を辿り、十一月十九日、再び豊沢町の実家に帰る。トシが亡くなったのは、その八日後の、十一月二十七日、午後八時三〇分のことだった。

その日はみぞれの降る暗く寒い日であった。豊沢町の実家は、古い、陰気な家で、蚊帳を吊り、屏風で囲って

たため穴蔵にでも入ったように暗かったという。室内には保温のため電気ストーブがそなえつけられていた。賢治は二階の部屋にいたが、時々階下へ下りてきて、南無妙法蓮華經と大きな声で唱え、トシにも寝たまま合掌させ唱えさせたりしていた。

トシの臥している病室は八畳間で、隣室には看護婦の藤本と派出所の細川キヨが控えていた。藤本がトシの体温をはかり、細い手をとって脈をみると、脈が十秒に二つしか打たない。驚いて細川に「賢治兄さんと呼んで下さい」と頼む。賢治は階下へ駆け下りて主治医の藤井謙蔵医師へ電話する。

藤井医師の診断では、もう時間の問題だということで親戚にも電話し、家中の者がトシの病室に集まってくる。

人々の見守る中、容態がいよいよ悪化、トシの死を覚悟した父は、「トシ子、ずいぶん病氣ばかりしてひどかったなあ。こんど生まれてくるときは、人になんぞ生まれてくるなよ」と言い、何か言いおくことはないかと尋ねる。トシは「こんど生まれてくるときは、こんなにわりやのごどばがりて苦しmanaあよにうまんでくる」と答えた。

賢治は死期の近づいたトシの耳に吹き込むようにお題目を唱えた。トシはうなづくようにして瞑目した。目を落とした時にはみんな枕元に集まっていた。賢治は胸と首を抱きかかえて「としさん、としさん、キヨさんもあるよ、おどさんも、おかさんもいるよ、みんないるよ、としさん、としさん」と大きな声で叫んだ。トシは目を開いたまま、返事もなかった。賢治はその後、押入れに頭をつっこんで「とし子とし子」と号泣した。

火葬場で棺の上に枯れた萱を山のように積んで火をつけた。賢治はその火の燃え尽きるまで朗々とお題目を唱え続けた。火がおさまってお骨を拾う時になって、賢治はそれを半分に分け、国柱会にも収めることを主張した。両親は、門徒（浄土真宗）なのだからと言ったが賢治は聞きそうもなく、お骨は二つに分けられた。翌年一月二十七日、父とシゲは、トシの分骨を国柱会の大霊廟のあった静岡県三保に納めた。

トシの死後、賢治は出家することを主張したが、自ら断念した。祖父の死の時も同じように出家することを主張している。

注 以上のようなトシ臨終の状況は次の三点によってまとめられた。

『宮沢賢治物語』（関登久也、学研、一九九五年、初版一九五七年）

『宮沢賢治の肖像』（森荘巳池、津軽書房、初版一九七四年）

『年譜宮澤賢治伝』（堀尾青史、中公文庫、一九九一年）

三、臨終詩編に即して

賢治はトシの臨終、その時の自らの心情を伝える三編の詩を書いている。すなわち「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」である。これらの詩編の収められた『春と修羅』は扉に「心象スケッチ 春と修羅 大正十一、二年」と記され、末尾に「目次」とあり、それぞれの詩の作られた日付が記されている。

たとえば、その冒頭の三行だけ引用してみると次のようになっている。

屈折率……………一九二二、一、六……………

くらかけの雪……………一九二二、一、六……………

日輪と太市……………一九二二、一、九……………

『春と修羅』に収められた詩は全部で六十九編あって、大体のところ制作の順に配列され、しかも各詩編を束ね

るタイトルがつけられている。冒頭は「屈折率」「くらかけの雪」「日輪と太市」など十九編の詩にタイトルとして「春と修羅」とつけられている。以下タイトルを示すと「真空溶媒」「小岩井農場」「グランド雪柱」「東岩手火山」「無声慟哭」「オホーツク挽歌」「風景とオルゴール」となっていて全部で八章に分類されていることになる。

トシの死をテーマとした詩は「無声慟哭」「オホーツク挽歌」というタイトルのもとに、それぞれ五編の詩がまとめられている。「オホーツク挽歌」としてまとめられた五編は、いずれも一九二三（大正一二）年七月三一日から八月一二日にかけて、青森、北海道を経て樺太に旅行した折の作品で、教え子の就職口を求めての旅行であったが、その中でトシの死後を問い続けて煩悶する心の軌跡が描かれている。「無声慟哭」のタイトルのもとにまとめられた五編中、最初の三編は「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」でいずれも二重括弧で（一九二二、一一、二七）とその制作の日付を示している。後の二編は「風林」「白い鳥」でそれぞれ（一九二一、六、三）（一九二三、六、四）の日付をもつ。このうち、前者は明らかな誤植であって（一九二三、六、三）とすべきところである。（二編の詩を読むと連続する日であることがわかる）

本稿で、「臨終詩編」と名づけたのは、（一九二二、二、二七）の日付をもつ最初の三編である。日付はトシの亡くなった日を示している。他の詩のように（ ）とせず、二重括弧でこれを示したのは、これが他の詩のような製作の日を示したものでない、ということを示しているように思われる。製作の日より、トシが亡くなった日の方が、この場合はるかに重い意味をもつ。臨終の日にこだわったというのは自然なことでもある。これらの詩が書かれたのは、トシが亡くなって、数日以内のことと思われる。

日付という問題について少し補足しておく。

第一に、賢治の詩にはそのほとんどに製作の日付が記されている。これは賢治が自らの詩を「心象スケッチ」と

呼んだことと関係があるのではないか。「心象スケッチ」とは賢治の別な表現を借りていえば、「記録された（これらの）けしき」であり、「このころの風物」（『春と修羅』序）であり、その時、その場で「かんじ」（感じ）られた「けしき」である。日付はその時、その場で感じられた「このころの風物」の記録だということを示したと思われる。移り変わる変化してやまない「心象」の記録だから、日付も大切になってくる。

第二に、西暦で日付を示したのはなぜか、という問題である。賢治は書簡等、私的な通信においては元号を用いている。ところが詩作の日付はすべて西暦になっている。これは狭い国家意識を越えた世界市民的、コスモポリタンな意識の表われだと思われる。

以下、三編の臨終詩編を取り上げて表現に即して考察してみたい。どんな伝記的な事実より、「作品それ自体」が重要である。わけても賢治の場合、書くことによって次々に想像の翼を広げ、殻を脱ぐようにして転生していった詩人、童話作家であった。

具体的に、作品の検討をする前に、臨終詩編の評価についていえば、「永訣の朝」を初めとする三編は近代詩の中で、最も美しい、悲しみに満ちた詩であり、魂の深みに染みわたる傑作中の傑作、「絶唱」の名に値する名作として知られている。この詩には兄妹愛の美しさや家族の互いの思いやりが、死別の悲しみを通して見事に表現されており、なおかつ、その悲しみを越えて立ち上がるうとする賢治の決意や理想が高らかに詠まれている。それは賢治とトシの日頃の深い交流、賢治自らの宗教的な鋭い感覚、理想の高さ、それらを表現する類まれな表現力の豊かさなどに負っている。

生命に対する深い畏敬の念と人間に対する愛、謙虚にして、生への意欲を鼓舞するものを「宗教的」という言葉で形容することが許されるなら、この詩は「宗教詩」としての深い叡智を含んだ作品といえよう。

(一)「永訣の朝」

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

うすあかくいつそう陰惨な雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゆとてちてけんじや)

青い蓴菜じゆんさいのもやうのついた

これらふたつのかけた陶碗たうわんに

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつぱうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゆとてちてけんじや)

蒼鉛さうえんいろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするため

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(あめゆじゆとてちてけんじゃ)

はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの

そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

……ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな二相系にさうけいをたもち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたぐいものをもらつていかう
わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Orade Shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのとざされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらばうにも

あんまりどこもまつしろなのだ

あんなおそろしいみだれたそらから

このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまころからいのる

どうかこれが天上のアイスクリームになつて

おまへとみんななどに聖い資糧をもたらずやうに

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

(1) (詩想の展開と主題)

「永訣の朝」の詩想^{注二}は、次のような形で展開している。

第一節―冒頭から二十七行目の「そらからおちた雪のさいごのひとわんを…」まで。

藤原嘉藤治家所蔵^{注三}の『春と修羅』では、この行末の「…」を削り、次行との間に「一行あけ」と記されている。ここに時間的なポーズがあり、場面の転換(第一節は室内)があることを、行あけによって明白に示そうとしたのであろう。

第二節―「…ふたきれのみかげせきざいに」から、それに続く、以下二十四行目の「くるしまなあよにうまれてくる」まで。冒頭に「…」を置いたのは、第一節で歌われた思いをひとたび、ここで静かに中断する時の流れを示したものだらう。第二節は、静かな叙景で始まり、再び詩想が白熱していく。

第三節―「おまへがたべるこのふたわんのゆきに」から、最後の「わたくしのさいはひをかけてねがふ」までの五行。

具体的に、各節の内容をまとめてみると、第一節は「あめゆじゆとてちてけんじや」という妹の言葉を受けて、外に飛び出すという賢治自らの行動が描かれる。その中で妹の死を前にした不吉な思い、心の動揺、妹への感謝と

いった心情が述べられ、それらが自分も（妹にならって）「まつすぐにすすんでいくから」という決意へと収斂していく。

第二節は、外に出て松の枝から雨雪を取って茶碗に入れるという自らの行動を描き、病いの苦しみと闘う妹への深い共感、哀惜の情が述べられる。

第三節は、自分の取ってきた雪が、妹ばかりでなく、すべての人の聖なる資糧となるように、という祈りで結ばれている。

主題として、この詩は「あめゆじゆとてちてけんじや」というトシの発した言葉を核として、愛する妹の死を前にした賢治の深い悲しみ、哀惜の情と、それを昇華して、あらたに生きようとする祈り、決意を述べたもの、とまとめることができよう。

（注一）「詩想」という言葉は一般的でないが、詩作に駆り立てる着想、即ち感情と深く結びついた思い、というような意味をこめて使ってみた。

（注二）詩集『春と修羅』の発行日は、一九二四（大正十三年）四月二〇日であるが、初版本が出てからも、作者自身の手によって単なる誤植の訂正にとどまらぬ手入れがなされており、現在宮澤家所蔵本、菊池暁輝所蔵本、藤原嘉藤治所蔵本の三点が知られている。以下の註解は初版本をもとにこれら三点の内容も必要に応じて取り上げた。（ちくま文庫『宮沢賢治全集1』の

後記参照）

(2) (日常語・平仮名表記)

「永訣の朝」は「けふ」「とほく」「おもて」「へんに」「あかるい」「ふつてくる」「かけた」「たべる」「あめゆき」「まがつた」「てつぱうだま」……など日常的な、平易な言葉（和語）が多く使われ、しかもそれが平仮名によって表記されている。これは臨終詩篇の一つの特色といつてよく、同じ『春と修羅』所収の他の詩と比べても目立つところである。それがまた、生と死、肉親愛といったテーマの普遍性ともあいまって、多くの人に親しまれている理由であろう。

こうした語彙の選択、表記法は妹に話しかけるようにして、あるいは又、妹に書き送るような気持ちで書かれたことから自然に生まれたものであろう。平仮名は何といつても「女手」であり、やさしい情感をこめるのにふさわしい文字、柔軟でたおやかな印象を読み手に与えるのである。漢字のように見て意味をただちに伝える力はないが、曲線は視覚的にも柔らかな印象を与え、平仮名の一文字一文字は、そのまま一音一音を読むような丁寧な感じを与えもする。歴史的仮名遣いで表記するのは、当時としては、当たり前のことであるが、この詩を読む現代の私達も、原文のまま賢治の表記のままに鑑賞すべきであらう。現代仮名遣いによっては味わえないふくよかさ、ふくらみが感じられるからである。

(3) 「けふのうちに／＼とほくへいつてしまふたくしのいもうとよ」

まだ存命のうちに「けふのうちに」「いつてしまふ」という形で（苦しむ妹を前にして）詩を作るとするのは心理的にみて不自然である。証言によると、容態の急変を聞き駆けつけた医師は、死ぬのは時間の問題だと言った、とのことであり、それを受けて家族・親族が病床に集まったという。トシの命は時間の問題であり、賢治はおそら

く、今日限りという思いで、仕えていたであろう。しかし、詩はその時作られたものではあるまい。三篇の臨終詩篇はいうまでもなく愛する者を失った悲しみを述べているのである。詩はおそらくトシが亡くなってから数日を経て書かれたものであろう。しかし、賢治はそれを回想、過去形という形でなく、「臨終のその時」をあらたに追体験しながら詩を書いた。臨終詩編の衝撃的といつてよいほどの生々しい迫力は、このように過去を現在進行形で表現する力に負っているといつてよいだろう。

「とほくへいつてしまふ」とは、もちろん死ぬことを指しているが、単に常識的な通念として、一種の婉曲表現として「死ぬ」という言葉を選じたというのではなく、死後の世界を「異空間」^(注)として把握していたことを反映しているように思われる。「とほく」だからこそ、その「とほく」をめざす旅という発想にもつながる。「オホーツク挽歌」と総称される一連の挽歌は、その「とほく」の世界を求める旅であるし、その「異空間」が天国的、浄土的な世界か、それとも地獄的な世界かをめぐって豊かなヴィジョンが繰り広げられていく。単なる「死」とか「無」という捉え方では決して生まれてこない、豊かなイメージの世界はそこから生まれてくる。賢治はそのようないわば「霊界」を経て、「現世」に再び降り立つ、つまり「死と再生」というテーマを、文学的にも、また実人生においても追求していったようだ。

「わたくし」という一人称にも注意したい。『春と修羅』全体をみると「わたくし」という表現が一番多いが、この他に「わたし」「ぼく」「おれ」「おら」などという表現が用いられており、それぞれの作品、文脈の中でいかにも適切なものが選ばれている。この一節の場合、最も丁寧な謙譲語が、あらたまった慎みの心を伝えている。

(注) 賢治の詩の下書稿には「異空間の实在」とか「異の空間の探索者」などという言葉が見える。(詳しくは『宮沢賢治語彙辞

(4) (みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ)

『春と修羅』所収の詩は、常に外界の自然—ことに、空や雲、太陽、山、雪、風、草木などといったものの、きわめて独自の、個性的な描写がある。この詩のような妹の死という「人事」に属する、劇的な場面においても、それが単に妹の死にのみ焦点があてられるのではなく、自然の中に包み込まれるようにして描かれている。そこに自然との心的な交流が生まれ、詩に広がりとお深さを与えている。

「へんにあかるい」という表現や、続く「陰惨な雪」という表現も、あるいはまた「びちよびちよ」「ふつてくる」とか「びちよびちよ沈んでくる」という表現も、客観的にみた空やみぞれの描写であると同時に、賢治自身の不吉な、不安な思い、あるいは悲しみの投影された表現である。

トシの亡くなった日は、確かにこの詩に表現されているようにみぞれ降る、寒い一日であったらしい。しかし、ここに描かれた情景は決して客観的な描写ではなく賢治の心情によって捉えられた、一字一句にその心がこもった表現であり、まさに「心象スケッチ」だといってよいだろう。(よく知られているように賢治は『春と修羅』を、詩集と呼ばれることを嫌い、「心象スケッチ」と称した)

(5) (あめゆじゆとてちてけんじゃ)

詩集『春と修羅』をみると「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の三編の詩の後に、賢治自らの註として「あめゆきとつてきてください」と書いている。三編の詩、総計六箇所についてこうした註が施されており、いずれも賢治

の耳元に生々しく残っているトシの肉声を記録でもするように忠実に書きとめ、それに註をつけたものである。それはトシの最後の言葉がどれだけ重要であることを示したものともしえる。いたずらに標準語などに改変することはできないのである。

藤原嘉藤治所蔵本では、「ちて」が「きて」に直されている。この方が意味としてはわかり易くなるが、賢治の教え子（沢里武治）の証言によると、賢治自身「ひこうち（飛行機）がちた（来た）」のように「き」を「ち」に近く発音していたという^注。「ちて」を「きて」に直したのは、単に誤植の訂正ということではなく、「きて」なのか「ちて」なのか、その発音を頭に思い浮かべた上で忠実に文字に改めようとして揺れた表記とみるべきであろう（似たような例として「ちゃん、ちゃんがうまこ」「ちや、ちやがうまつこ」（傍点筆者）などという表記の揺れを挙げることもできる）

「あめゆじゆ」は、花巻方言では「あめゆぎ」となるのが一般的だが、トシの言葉は「あめゆじゆ」と聞こえたのであろう。先入観にとらわれずに音そのものを忠実に聞き取り表記しようという傾向が賢治にはある。

「けんじや」を「賢治や」という意味だと解釈する説もあるが、ここはやはり、賢治自らの註を重視すべきであろう（トシは賢治を「けんさ」「けんつあ」とか「えなさん」と呼んでいたようである）。共通語の「〜てください」は花巻の方言では「〜てけでじゃ」となったり「〜てけんじや」（「おめでとうございます」を「おめんとうございます」と言うように「で」が「ん」になる傾向もある）となったりする。

四度に渡って繰り返される「あめゆじゆとてちてけんじや」は、文脈の中でそれぞれ違った働きをもっている。一度目のそれは、二人だけの呼吸も聞こえるような静かな病室で、ふと嘆息のように漏らした声である。その声は賢治に聞こえはしたものの、唐突な言葉ゆえ、意味を理解できなかった。トシはそこでもう一度、はっきり、少し

大きな声で言った。賢治は稲妻に打たれたようにはっとその意味を理解し、「まがつたてつばうだま」のように外に飛び出した。三度目のそれは、外に飛び出してみぞれを浴びて立つ賢治の耳元に木霊のように聞こえ、残っているトシの声である。そして四度目のそれは、トシが何のために自分に雨雪を取って来てくれるように頼んだのか、その本当の意味を理解した上で、その妹の気持ちになって語られた（といっても、賢治の心の中で聞いたものである）ものである。

実際にトシが何度、「あめゆじゆとてちてけんじや」と言ったかはわからないし、また問題でもない。トシの言葉を賢治がどう受け止め、作品化したかということが問題である。賢治はこの詩を創作することを通して、トシの死の意味を作り出そうとした、と言えるだろう。

（注）板谷栄城氏の御教示による。

(6) (青い蓴菜じゅんさいのもやうのついた／これらふたつのかけた陶碗たうわんに／おまへがたべるあめゆきをとらうとして／わたくしはまがつたてつばうだまのやうに／このくらいみぞれのなかに飛び出した)

「蓴菜」は、スイレン科の多年性水草で「ぬなは」ともいう。葉は水に浮かび裏面が紫色で、寒天のようなぬめりがあり、葉や若芽は食用となる。賢治の詩の中に幾度か登場する植物である。トシの枕もとに、二つの、少し端の欠けた陶器の椀がある。それに雨雪を取ろうとして賢治は、暗い「みぞれ」の中に飛び出す。たまっているものは「雨雪」と表現しているが、降ってくるものとしては「みぞれ」と表現されている。（後に「みぞれはさびしくたまっている」というのは降ってたまったもの、として意識した表現であろう）

「ふたつ」というのは、おそらく夫婦茶碗で、そこに絆の深さまでこめられているようだ（原詩では「陶碗」と表記されているが「蓴菜のもやう」が描かれ「かけ」ているということから考えて漆器の「椀」ではなく陶磁器の「碗」であろう）。結びに近い所で「このふたわんのゆきに」祈る、ということころにも兄妹性、その絆の深さが感じられる。それにしても、蓴菜の模様といい、端の少し欠けた碗といい、賢治の観察は悲しみの中にあっても曇らされることなく、まざまざと細部を描ききっている。

しかし、それにしても「雪のひとわん」を頼んだのに、「ふたつ」の茶碗を持って「まがつたてつばうだまのやうに」「飛び出し」たのであろうか。飛び出す時に、戸をどのようにして開けたのだろうか…などということを考えてみると、「ふたつ」は、あるいはフィクションではないかという気もする。たとえフィクションであったとしても、賢治の心の中で、祈りの中で「ふたわんのゆき」が届けられた、とみることもできる。（愚かな想像だろうか）

(7) (ああとし子／死ぬといふいまごろになつて／わたくしをいつしやうあかるくするために／こんなさつぱりした雪のひとわんを／おまへはわたくしにたのんだのだ)

トシが自らの死を目前にして「雪のひとわん」（トシが頼んだのは「ひとわん」で充分なはずだったが、賢治は「ふたわん」届ける）を頼んだこと、それは自分自身のためでなく、兄のため、兄の一生を「あかるくするため」なのだという。なぜ今わの際において「雪のひとわん」を頼むことが賢治を一生明るくすることにつながるのだろうか。

第一に考えられるのは、最後の頼みを親や他の弟妹たちでなく、他ならぬ賢治に頼んだことを通して、兄に対す

る信賴の深さを示したということである。そのように、妹からの愛情と信賴を受け止めたことが、賢治の心の中で支えや慰めとなった。それが賢治を「あかるくする」ということである。

第二に、「雪」を頼んだことに重い意味がある。雪は後述するように、聖なる食べ物であった。そしてその聖なる食べ物と妹のみならず、すべての人々に届けるところに賢治は自らの使命を見出す。それは妹から託された生涯の使命であり、その使命を与えられた事が、「あかるい」生き方をもたらすのである。なぜなら賢治は実人生の目的をつかみかね迷い続けていたからである(注)。

『春と修羅』所収の詩「くらかけの雪」においても「たよりになるのはくらかけつづきの雪ばかり」「ほのかなのぞみを送るのはくらかけ山の雪ばかり」とあるように、雪の明るさは「のぞみ」を送るものとして感受されている。

トシが雪を取ってきてくれと頼んだのは、実際には、兄賢治のためというより、自分でそれに触れたかった、ということであったかもしれない。しかし、賢治は「自分に」、そして他ならぬ「雪」を頼んだ、ということに限りなく重い意味、メッセージを感じとった。トシは現実のトシそのものというより、賢治の作り上げたトシのイメージとってよいだろう。自分を「あかるくする」ために頼んだ妹の氣遣い、それが続く次の詩想を呼び起こす。

(注) 賢治がどれ程、この実人生の目的、課題をつかみかねて苦悶したかは大正八年秋の保阪嘉内宛の書簡に生々しく描かれている。こうした苦悶の結果が、田中智学、国柱会への心酔、大正十年の上京と、高揚する行動につながっていったのかもしれない。トシの亡くなった大正十一年は、教師という職も得て精神的にも安定していたとはいえ『春と修羅』の詩編、たとえばその冒頭の「屈折率」などをみると、ある種のためらい、逡巡が感じられる。

(8) (ありがたうわたくしのけなげないもうとよ／わたくしもまつすぐにすすんでいくから)

死の床にあつてさえ、自分自身の願望を優先せず、兄のことを思うやさしさ、けなげさ。「けなげ」とは、幼い者、弱い者が、それにもかかわらず、なおけんめいに努めることである。死を前にして兄を氣遣うトシの姿は純愛の極地ともいえるだろう。それを思うと賢治の心には自ら感謝の思いが湧き出してくる。そうした「けなげな」妹に対する応答が「わたくしもまつすぐにすすんでいくから」という誓いになる。これは死にゆくものの生を残されたものが引き継いでいく、ということを示す一例ともいえる。トシの死は、単なる悲しみや絶望、喪失感ではなく、その死を通して賢治自らがあらたな思いで生きる決意と内省をもたらすスプリングボードにもなっていくのである。

(9) (はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから／おまへはわたくしにたのんだのだ／銀河や太陽 氣圈などよばれたせかいの／そらからおちた雪のさいごのひとわんを…)

苦しみのさ中であつて、兄賢治のために、雪を取ってきてくれと頼んだのだ、ということが具体的な形で繰り返され、一層、妹への感謝の思いを高めている。どんなに自分が苦しもうと他者への氣遣いを忘れないやさしさ、それを賢治はわが胸に刻みつける。

雪は空から、銀河・太陽・氣圈の世界の空から落ちたものとして、限らない深さ、神秘性を感じさせるものとして描かれる。

(10) (…ふたきれのみかげせきざいに／みぞれはさびしくたまっている／わたくしはそのうえへにあぶなくたち／雪と水とのまつしるな二相系をたち／すきとほるつめたい凧にみちた／このつややかな松のえだから／わたくしのやさしいもうとの／さいごのたべものをもらつていかう)

御影石は花崗岩の石材の総称で、神戸市御影付近（六甲山麓）が産地として有名であったことから名づけられたもので、硬くて美しいことから建築石材や墓石等によく使われる。ここでは宮澤家の庭に置かれてあったものであろうが、「ふたきれ」というところには、「ふたわんのゆき」同様、兄妹性の暗示につながるものが感じられる。対（ペア）をなして調和、安定が保たれるように、二つあつてこそ全き世界まった、それが失われるというのがトシの死の意味ではなかったか。

「二相系」——これ又、二つであり、一つのもので二つの相をなしている、ということを示しているともみることがができる。固相、液相、気相という三つの状態（相）のうち二つの相が共存しているというのが二相系である。ここでは、「雪と水」つまり固相と液相を指している。松の枝にもついている雨雪は、冷たい凧にみちた、美しい雪である。それが妹の「さいごのたべもの」となり、そのイメージは飛躍して「天上のアイスクリーム」からさらには「兜卒とそつの天の食じま」へと変化し、豊かな象徴性を獲得していく。

(11) (Ora Orade Shitori egumo)

原註には「あたしはあたしでひとりでいきます」とある。花巻弁では、自称として、男も女も「おら」と言うし「ひとり」は「しとり」と発音される。この言葉は、自分がたった一人で死んでいくのだ、ということをつたえたものである。トシが一人、ぼつねんと、呟いたこの言葉に賢治は深い衝撃を受ける。日常的な会話の世界を断絶した、

己れ一人の死を見つめる妹の思い、それはコミュニケーションを断絶した異様なものとして聞こえた。それがローマ字表記にしたゆえんであろう。

(12) (あああのとざされた病室の／くらいびやうぶやかやのなかに／やさしくあをじろく燃えてゐる／わたくしのけなげないもうとよ)

証言によると、病人の安静のために屏風を立て、蚊帳を吊るしたというし、暗い部屋にはストーブも焚かれていたという。もちろん、家庭での看取り、家族に囲まれての死であるが、家族が作品の中で登場するのは次の「松の針」や「無声慟哭」で、特に後者はトシと母との言葉のやりとり、交流が美しく描かれている。

「とざされた病室」という言葉には、林へ行きしたがっていた（即ち、病氣から解放されることを願っていた）トシへのいたわりが込められている。「やさしくあをじろく燃えてゐる」という表現も、高熱に喘ぎ、苦しむトシの姿を美しく描いたものである。それは病いや死の美化といってもよい。詩人の表現力の賜物であろうが、結核による死はその死顔が美しいとある看護師が教えてくれた。結核という病氣がロマン化され、その死もしばしば美しいものとして描かれるが、臨終詩篇もその一例として、意味づけることができよう。

「恋と病熱」（『春と修羅』所収の詩）によると、病熱に苦しむ妹の姿を「あいつはちやうどいまごろから／つめたい青銅の病室で／透明薔薇ばらの火に燃される」とも表現している。「青銅」は青い蚊帳のことをいったものである。ここでも生命活動、特に高熱に苦しむ姿は、燃焼というイメージで捉えられている。

ちなみに『よだかの星』の中で、死んだよだかは、永遠の命を与えられ、その体が「燐のやうな青い美しい光になつて、しづかに燃えて」いるという。強引な結びつけ方かもしれないが「やさしくあをじろく燃えて」いたトシ

は、賢治の頭の中でついに、永遠に燃え続ける啓示の光のような存在となったのかもしれない。『春と修羅』出版後まで作品に手を加えたり、トシの死後を尋ねる一連の挽歌を作ったり、明らかにトシの死の体験をふまえて書いたと思われる童話などを書いたことを考えてみると、賢治がトシの死を生涯の命題としたのは確かであるように思われる。

(13) (この雪はどこをえらばうにも／あんまりどこもまつしろなのだ／あんなおそろしいみだれたそらから／このうつくしい雪がきたのだ)

胸打たれる一節である。恐ろしい、乱れた空、そこからやってきた美しい雪。戦慄を覚えるような雪の犯しがたい美しさ。雪をとろうとして、一瞬その犯しがたい美しさにたじろぐ鋭い感性。雪は「美しい」という以上に、「清らか」で、「聖なるもの」のイメージをおびている。仏教を象徴する蓮の花は、濁った池に清らかな花を咲かせるものとして、世俗にあってもそれに染まらない純粋な信仰心を表わしたものであるというが、この詩における雪は賢治の生み出した新鮮にして胸打たれる深いシンボルとして忘れがたい。

(14) (うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごどばかりで／くるしまなあよにうまれてくる)

この言葉は、宮澤家に仕えた細川キヨの証言によると、父政次郎がトシに何かいうことはないか、と尋ねたのに対して、トシが答えたものだという。賢治はそれをトシの呟きのような言葉として、詩の中にはめ込んだ。

原註によると「またひとにうまれてくるときは／こんななじぶんのことばかりで／くるしまないようになうまれてきます」とある。ここには輪廻転生に対する信仰がある。「どうかきれいな頬をして／あたらしく天に生まれてく

れ」(「無声慟哭」と賢治は祈っているが、これは「天に」即ち、あの世における再生をいつているのに対し、妹は、この世にもし再び人として生まれてくるなら、という現世における再生をいつている。それは、自らの生涯に対する深い悔いがあったからである。それは、トシが自分のことだけで苦しんできたこと、即ち、人のために何一つ役に立てなかった、という悔いである。宮澤はる(賢治の祖父である喜助の弟、徳四郎の末娘)の証言によると、トシはつねづね「人のためになりたい、郷土のために働きたい」と言っていたという(注)。「うまれでくるたて」うんぬんという言葉は、トシが自らの一生を総括した言葉として、実に重い意味をもっている。死んでも死にきれないという思い、深い悔恨を抱いてトシは今死のうとしているのである。そのトシの思いをいかに受け止め、受け継いで生きていくのか―それがトシの死を引き受けて生きる賢治の生涯の課題となる。賢治のその後の、自己犠牲的な献身的な生き方は、トシのこの思い、言葉なしにはありえなかった、といつては、いいすぎであろうか。

(注)「宮沢トシ、その生涯と書簡」(梶尾青史、「ユリイカ」復刊一周年記念七月臨時増刊。青土社刊)による。

(15) (わたくしはいまこころからいのる／どうかこれが天上のアイスクリームになつて／おまへとみんななどに聖い資糧かてをもたらずやうに／わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ)

二碗の雪をトシのもとに持ってきた賢治の祈りである。その祈りは、言葉だけの祈りでなく、「こころから」の「わたくしのすべてのさいはひをかけて」願う、わが体を張った命がけの祈願であった。

「いのる」とは語源的には「斎(い)告(の)る」とされており、聖なるもの、絶対者である神や仏の名を呼び、幸いを願うことである。徹底した宗教的な人間である賢治の精神生活の特徴づけるもの、それはこの祈りである。

ことに危機に直面した時、痛切な祈りとして深められた。トシの死は賢治の心に祈りをわきあがらせた。「かけて」とは「賭けて」であり、自分の幸福をそれと引きかえにしてかまわない、そのためなら自分の命さえ惜しまない、というほどの強い決意をもってなされている。

その切実な祈願の内容が「どうかこれが天上のアイスクリームになつて／おまへとみんななどに聖い資糧をもたらすやうに」ということである。しかし、これは後に宮澤家所蔵本では「どうかこれが兜卒の天の食に変つて／やがてはおまへとみんななどに／聖い資糧をもたらすことを」と推敲されている。「天上のアイスクリーム」(注)を「兜卒の天の食」に改めたことが最も重要な違いである。

「兜卒」は「兜率」の誤りで、兜率天は欲界六天の一つで内院、外院があり、内院には、将来、仏となるべき菩薩が最後の生を過ごし、現在は弥勒菩薩が衆生を救おうとして待機している世界とされる。外院は天人の住む所だという。妹のいく世界を「天上」という平凡な言葉から「兜卒天」という仏教用語に変え「アイスクリーム」もこれまた仏教語の「食」「断食」「乞食」いずれも仏教の呉音の読みで「じき」である)に変えた。これによって素朴でやや幼い感じのする表現が、仏教的な詩、一つの宗教詩のような味わいを深めることになった。

トシに持ってきた(届けた)二碗の雪が兜率天の食となり、「おまへとみんななどに」「聖い資糧」をもたらすやうに、という祈り。しかもそれは前述したように自分のすべての幸福を犠牲にしても、という切実な、強い祈願であった。「永訣の朝」を論ずる多くの研究書は、この点についての考察が不十分だと思われる。少々独断的な見解になるかもしれないが、議論の叩き台として問題を提起してみたい。

①トシに届けた二碗の雪は「天上のアイスクリーム」「兜卒天の食」となつてといふのであるから、一般的な常識で考えれば、これは仏教でいう「供物」ということになる。供物とは神仏に供えるということとで飲食(おんじき)

・衣服・臥具・湯薬を施すことを四事供養といい、この他に花や香など様々なものが仏法僧の三宝に対して供えられる。日本では死者を悼み、死者に手向けるものとして捉えられることが多いが、本来は仏陀（覚者）菩薩（悟り）を求めて修行する者）に対して、心からなる尊敬の心をもって奉仕し、供えるということであった。賢治はここで雪を誰に届けようとしたのか―それは死にゆく（というより、死んだ）トシに対してであることはむろんだが、それが同時に「みんな」に届けたいと願っている。「みんな」とは一般的には「死者」と考えられるが、ここでは自分の幸福を犠牲にしてもというのであるから、むしろ死者というよりも「生きとし生ける者すべて」と考えるべきであろう。（そう考えれば、雪は死んだトシに供えるというよりも、生けるトシの前に自らの誓いをこめて差し出されたものとも考えられる。）

②「雪」は単なる雪でなく、賢治の心の中で「聖い資糧」としての象徴的な意味をもっている。「聖い資糧」とは何か。一般的には身心を聖める食物、つまり精神の糧となり、魂を浄化する芸術、文学などを指すといってよいだろう。賢治の場合、そうした一般的な意味を越えて、深く重要な意味をもっているのがこの「聖い資糧」である。「山の晨明に関する童話風の構想」という詩に「蒼く湛えるイーハトーボのこどもたち／みんなでいつしよにこの天上の／飾られた食卓に着かうでないか／たのしく燃えてこの聖餐さんをとらうでないか」という一節がある。「聖い資糧」をとるとは一語で言えばこの「聖餐」ということになる。聖餐はキリスト教の言葉で、イエスが最後の晩餐でパンと葡萄酒をとり、これを「私の身体である。血である」と言ったことに基づくもので、イエスの血と肉を弟子たちに分かち儀式である。カトリックではこれを御ミサと称し、パンは御聖体と呼ばれる。「山の晨明に」の詩では霧がゼラチン、雲が電気菓子、こめつがはザラメというふうに山の夜明けを取り巻く自然の個々のものが、聖なる食べ物として捉えられ、子供達に、共にこの食べ物を頂こうと記されているのである。この詩は「一九二五

・八・一一」の日付をもち、トシの死後に書かれた作品であるが、雪を聖なる食べ物、魂を浄化するものとして捉えている「永訣の朝」の延長上にあるといつてよい。「聖い資糧」「聖餐」という言葉は以上のようにカトリックの影響があると考えられるが、パン・イエスの身体＝御聖体を「自然」と見る点に「山野の跋涉家」であり、東西の宗教に通じていた賢治の独自の宗教思想がある。

賢治は自らの自然体験そして宗教体験を通じて、自然のもつ、そうした浄化の力を確信しており、それを作品として定着させることを、己が文学の使命、課題とした。『注文の多い料理店』の序文で、自分の作品が「あなたのすきとほったほんたうのたべものとなることをどんなに願うかわかりません」と記しているのは、賢治のそうした宗教文学者としての使命感の表白ともみられるのである。

③重要なことは、トシの死を契機として、自らの宗教文学者としての使命感を、より一層強固なものにしたということである。賢治は法華経の布教をこの社会における使命としていた。「先づは自ら勉強して法華経の心をも悟り、奉り働きて自らの衣食をも、つぐのはしめ進みては人々にも教へ又給し若し財を得て支那印度にもこの経を広め奉るならば、誠に誠に父上母上を初め天子様、皆々様の御恩をも報じ折角御迷惑をかけたる幾分の償をも致すことと存じ候」(一九一八年二月一日付、父宛書簡)とあるように、両親に対する最大の親孝行が法華経を広めることだ、とも考えていた。そうした思いが一九二一(大正一〇)年の上京を契機として「法華文学」の創作として具体的な実践に結びついた。トシの死によって賢治は、以後の人生を人々に「雪」——「すきとほったほんたうのたべもの」を届けることを自分の使命にする決意を固めたと思われる。

(注)『宮沢賢治の愛』(境忠一、主婦の友社刊)によれば、トシがアイスクリームを好んだこと、当時は珍しいもので、賢治が妹

のために自転車に乗って買い求めにいったことなどが指摘されている。現代の感覚で、ありふれたものとして考えてはなるまい。

(二)「松の針」

さつきのみぞれをとつてきた

あのきれいな松のえだだよ

おお おまへはまるでとびつくやうに

そのみどりの葉にあつい頬をあてる

そんな植物性の青い針のなかに

はげしく頬を刺させることは

むさぼるやうにさへすることは

どんなにわたくしたちをおどろかすことか

そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ

おまへがあんなにねつに燃され

あせやいたみでもだえてゐるとき

わたくしは日のとどこでたのしくはたらいたり

ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた

(ああいい さつぱりした

まるで林のながさ来たよだ)

鳥のやうに栗鼠りすのやうに

おまへは林をしたつてゐた

どんなにわたくしがうらやましかつたらう

ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ

ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか

わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ

泣いてわたくしにさう言つてくれ

おまへの頬の けれども

なんといふけふのうつくしさよ

わたくしは緑のかやのうへにも

この新鮮な松のえだをおかう

いまに雫もおちるだらうし

そら

さはやかな

ターペンティン

terpentine の匂もするだらう

(1) (詩想の展開と主題)

「松の針」は「永訣の朝」に続く詩である。「永訣の朝」において、賢治はトシの願いに応えて、外に出て雨雪を持ってきた。トシはそれを見、おそらくは触れもして喜んだであろう。しかしそうだったことは書かれていない。「松の針」で描かれるのは、賢治が再び外に出て持ってきた松の枝、それに対するトシの反応、そこから繰り広げられる賢治の思いである。

トシは兄からその松の枝を受け取ると、死を前にした病人とは思われないほど激しく、それを頬に押し当てた。そのトシの様子を見て賢治は、林に行きたがっていた病めるトシを思い、それとは対照的に働いたり歩いたりしている健康な自分のことを思う。そこに分かち合い難く結ばれた二人とはいえ、病む者と健康な者との落差がある。それが一層、トシを失う悲しみを募らせる。「いつしよに行けとたのんでくれ」という賢治の言葉は、死にゆくトシと完全に同化したという願いでもあり、それがかなわぬだけに喪失感も深い。その絶望的な喪失の悲しみを鎮め、癒すように松の枝、そのさわやかな匂いを詠んで、歌い収める。

主題としては、死を前にしたトシの林(自然)への憧れ、そして健康回復へのはかない願いと、そのトシを失うという絶望的なまでに深く高揚する悲しみ、とでもまとめられようか。

(2) (さつきのみぞれをとつてきた／あのきれいな松のえだだよ)

外に出て松の枝を取ってきた賢治は、トシの目の前にそれを示して言う。しかしこの言葉は共通語で書かれていて、直接自らの声を記したものではない。これは、妹の言葉が方言で書かれているのと対照的である。自らの言葉は、表出された音声より、自分の頭の中にある思いとして記されているのに対し、トシの言葉は、その肉声が忘れ

がたいものとして強く心に刻まれているからである。賢治の声としては「さきた、みぞれとってきた。あの、きれいな、まづのえだだぢえ」というふうな言葉であったろう。

(3) (おお おまへはまるでとびつくやうに／そのみどりの葉にあつい頬をあてる)

「おお おまへは」という表現はヨーロッパの詩によく見られる表現法で、賢治がこの頃熱中していたベートーヴェンの「運命」や「合唱」の歌詞などの影響があるのかもしれない。大仰な、幾分翻訳的で、ドラマチックな響きをもつ言葉であるが、トシを取りまく賢治たちの驚きを表わす感動詩として違和感なく伝わってくる。

「あつい頬」―即ち、熱で紅潮した熱い頬である。松の葉の「みどり」と熱で紅潮した頬の紅、冷たさと熱さの対比も感じられ、熱を癒す松の緑、冷たさも感じられる。それは自然のもつ、癒しの力といってもよいだろう。賢治はトシがこの松の枝によって癒され、慰められるように祈っているのである。

ここで「みどりの葉」といっていることは、次に「植物性の青い針」と言い換えられ、それが「頬を刺す」という表現と響きあっている。「針」であればこそ、「刺す」行為の激しさがしのばれ、我を忘れて「むさぼる」ように熱中する行為の強さが印象的に浮かび上がってくる。

(4) (おまへがあんなになつに燃され／あせやいたみでもだえてゐるとき／わたくしは日のてるところでたのしくはたらいたり／ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた)

病いに苦しむ妹と、のん気に明るく生きている自分があざやかに対比して描かれている。このような対比は次の「無声慟哭」の中にも描かれ、妹への憐憫の情を募らせ、自分を内省へと誘う契機となっている。「ねつに燃され」

は「永訣の朝」の「やさしくあをじろく燃えてゐる」という描写にもつながるものであり、高熱に喘ぐ様を燃焼のイメージで表現している。自らの行動を描いた「日のてるところで……」は、農学校における楽しい実習作業をいったものである。日記的な小品『イーハトーボ農学校の春』をみるとわかるように、この頃賢治は稗貫農学校の教師として、楽しく充実した教師生活を送っていた。「たのしくはたらいたり」というのも同様に、その実習を指す。「ほかのひと」というのは、おそらくは、この頃、賢治の心の中にあつた恋する女性のことであろう。詩集『春と修羅』には、所々に秘めたる恋、抑圧された恋心が潜んでいる^(注)。トシの死は、自らの恋を「軽薄」なものとして禁ずる一つの理由になつたと思われる。

(注)『隠された恋』(牧野立雄、れんが書房新社、一九九〇年刊行)に、詳しく取り上げられている。

(5) (ああいい さつぱりした／まるで林のながさ来たよだ)

「まるで林のながさ来たよだ」は、原註に「まるで林の中に来たようだ」とある。トシが松の枝葉に顔を押しあて、目をつむって、呟いた言葉である。熱と痛みに苦しむトシはこの松の枝、青い針、その冷たさ、緑、匂いをどれ程心地よく感じたであろうか。この一瞬、病いを忘れ健康を回復しているような感じさえ、この言葉には、こもっている。賢治はそこからトシがどれ程林を慕っているか、賢治のことをうらやましく思っているかを推しはかる。こうした外界の自然を喜び、それによって慰められ、力づけられる感性は賢治と共通するものであり、賢治の病床詩篇、たとえば「眼にて云ふ」などをみると、青空、風などが病いの中にあつても限りなく心地よいものとして表現されている。

(6) (ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ／ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか／わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ／泣いてわたくしにさう言つてくれ)

「永訣の朝」では「とほくへいつてしまふ」と書かれていたが、ここでは「さらうとする」とトシ自らの意志をこめた表現にしている。それがさらに「ひとりでいかうとするか」という表現を呼びおこし、ついに「わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ」という絶叫にも近いような言葉へと発展していく。

「ほんたうに…」とは、トシの荒々しい行動や、その言葉から、死んでいくことが信じられないからであり、にもかかわらず妹の死を受け入れなくてはならない賢治は、「いつしよに行けとたのんでくれ」と願うのである。これは直接にはトシに頼んでいる言葉だが、実際には賢治自らのトシとの一体願望の表現といってよいだろう。親しい者、愛する者の死を体験することは多いが、これほどの深い、絶望ともいえるほどの深い悲しみを味わうことは私達の生涯において多いわけではない。賢治にとってトシを失うことが身を切るような痛切な体験であったことをこの詩句は示している。

(7) (おまへの頬の けれども／なんといふけふのうつくしさよ／わたくしは緑のかやのうへにも／この新鮮な松のえだをおかう／いまに雫もおちるだらうし／そら／さはやかな／terpentineの匂もするだらう)

賢治はトシのその頬の美しさを讃え、せめて安らかに旅立たせようとする。これは続く詩「無声慟哭」の中で、さらに詳しく描かれていく。死にゆくものが美しいということは、その人にとって、一つの慰めである。ましてトシは若い娘であった。行を二文字ずつ落として書かれたこの八行は、トシに語りかける限りないやさしさに満ちている。

トシを美しく見送るべく賢治は、蚊帳の上に、つややかな松の枝を置く。そこから垂れる雫、病室に漂う *terpentine* (テレピン油。マツ科植物の樹脂を蒸留して得た油状揮発性の液) は、病室を清め、すがすがしい聖らかさに満ちている。看取りの、きめ細やかな心配りがここにはある。

(三)「無声慟哭」

こんなにみんなにみまもられながら

おまへはまだここでくしまなければならぬか

ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ

また純粹やちひさな徳性のかずをうしなひ

わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき

おまへはじぶんにさだめられたみちを

ひとりさびしく往かうとするか

信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが

あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて

毒草や蛍光菌のくらしい野原をただよふとき

おまへはひとりどこへ行かうとするのだ

(おら おかないふうしてらべ)

何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら

またわたくしのどんなちいさな表情も

けつして見遁さないやうにしながら

おまへはけなげに母に訊くのだ

(うんにや ずるぶん立派だぢやい)

けふはほんとに立派だぢやい)

ほんたうにさうだ

髪だつていつさうくろいし

まるでこどもの苹果りんごの頬だ

どうかきれいな頬をして

あたらしく天にうまれてくれ

(それでもからだくさえがべ?)

(うんにやいつかう)

ほんたうにそんなことはない

かへつてここはなつのはらの

ちいさな白い花の匂でいつぱいだから

ただわたくしはそれをいま言へないのだ

(わたくしは修羅を歩いてゐるのだから)

わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは

わたくしのふたつのこころをみつめてゐるためだ

ああそんなに

かなしく眼をそらしてはいけない

(1) (詩想の展開と主題)

「無声慟哭」は、臨終詩篇の最後の作品で、いよいよ死ぬという時の、トシの言葉や様子が描かれている。それは同時に、修羅の道を歩く自分を映し出す鏡のような役目を持っている。即ち「松の針」で病気で苦しむ妹と、健康な自分を対比させた賢治は、ここでその対比をさらに深化させ、自らの内面を深く凝視し、修羅として生きていく自分を懺悔し悲しむのである。「慟哭」とは大声を上げて嘆き泣くことであり、その修飾語として「無声」という言葉を添えるのは矛盾ともいえる。だが、自らを見つめて落とす涙―修羅の涙は、声にならない深い内省であり「かなしさうな眼」としてしか表には現れざるをえない。賢治のそうした心を見抜いてトシは、「かなしく眼をそら」そうとする、そのことが賢治を一層悲しませる。トシのまなざしを受けられないことは見放されたにも等しいのである。トシの眼はこの時、賢治の内面を深く凝視する神、仏のような聖なるものの役目をしていてもいえない。

主題としては、死を前にしたトシの死への不安と周囲へのやさしい気遣い、そして、そのようなトシを心から力づけ、励まして旅立たせることのできない修羅たる己れの悲しみ、死に赴こうとする今、この時をさえ、美しい安らぎの場として捉えることのできない、自らの信仰の浅さを責め、高い理想をめざしつつも、人間的な弱さとの間

で分裂する己れの心を見つめる悲しみ、とでもまとめられようか。

柏木哲夫氏は出産の時「助産婦」が必要であるように、死にゆく者を介護する「助死婦」の役割が重要だという事を提唱しておられる^(注)。これは必ずしも女性に限られたことでないから、もっと一般化して「助死者」という言葉を使っていえば、この詩は、良き「助死者」たりえない（安心して死に赴かせる力のない）自らの信仰の浅さを悲しむ詩といってもよいであろう。

(注)『生と死を支える』（柏木哲夫、朝日新聞社刊）

(2) (こんなにみんなにみまもられながら／おまへはまだここでくしまなければならぬか)

トシはいよいよ死が近づいたらしく呼吸も喘ぎとなつてゐる。家族達は皆、その枕辺に座り不安げにトシを見守つてゐる。その中でトシはますます苦しげに見える。緊張と不安、沈黙の長い時が流れる。賢治はトシの苦しみに同情し、共感し、その苦しみをとってほしいと願う。「まだここでくしまなければならぬか」には、何ものかに抗議するような響きがある。「無声慟哭」でクローズアップされるのは「ここ」||今わの際の、その一瞬から、さらにこれから行くとうとしてゐる死後の世界についての意識である。

(3) (ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ／また純粹やちひさな徳性のかずをうしなひ／わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき／おまへはじぶんにさだめられたみちを／ひとりさびしく往かうとするか)

自分が信仰（それは賢治にとって「力」の源泉でもあった）から離れ、純粹さも徳も失つて修羅の道を歩んでい

る時、妹は死への孤独な、寂しい道を歩もうとしているのかと問う。自らを深く、厳しく内省すると同時に、トシの孤独な死を思う。同じ事は次の一節でも反復され、修羅を歩む自己を悲しい思いで内省し、トシの不安な孤独な旅―死出の旅を思う。

もし自分が信にそむかず、精進を重ねて、生きていくとの自負があるなら、このような悲しい内省はなかったはずである。トシの死は自らの信仰をふり返り、自己を内省する重要な契機となった。そして己れを責める意識が強ければ強いほど、逆にそこから立ち上がる力も強くなる。自分を修羅だとトシの前で語ることは、あたかも懺悔ざんげ、告白のような役割を果たして、あらたな自己構築をうながしていくのである。そのような倫理的、宗教的な意味をもちながらも賢治はそれを詩語として、イメージ化していく。「修羅」の道は「青ぐらい」道であり、「毒草や螢光菌のくらしい野原をただよふ」ように、あてどない迷いの道、あるいは又、「のばらのやぶや腐植の湿地」のおりなす「諂曲てんくつ模様」(詩「春と修羅」)なのである。

(4) (おら おかないふうしてらべ)

原註には「あたしこわいふうをしてるでせう」とある。南部弁では女性も自分のことを「おら」という。「〜てら」というのは「〜ている」、「〜べ」は「べし」という推量の助動詞で「きつと〜でしょう」という意味である。

「無声慟哭」のモチーフになっているのは、トシの今わの際の二つの言葉、即ち、この「おらおかないふうしてらべ」と「それでもからだくさえがべ」という言葉である。それはいずれも、死にゆく自分の姿が他人には死相を漂わせた気味悪い、嫌悪感をもよおさせるようなものではないか、という、娘らしいやさしさ、心配りから生まれた言葉である。臨終の床にあってなお、こうして他者の心を思うところにトシのけなげさ、純情が思われる。

それに対して母は「うんにや ずいぶん立派だぢやい、けふはほんとに立派だぢやい」と励まし、「うんにやいつかう」と強く否定する。母の言葉も見事な、本当に「立派な」言葉であり、母親らしいいたわりと、母性愛からくる強さを感じさせる。臨終詩篇の美しさ、その深い感銘は単に賢治のトシへの愛情の深さだけでなく、トシの賢治や家族を思う気持ち、母のこうした毅然とした強い愛情の表現、それらが渾然一体となって、家族愛の表現ともなっている点にある。

(5) (ほんたうにさうだ／髪だつていつさうくろいし／まるでこどもの苹果りんごの頬だ)

母の言葉を受けて賢治も、トシが死にゆくものとは思われないほど美しく、黒々とした髪をもち、子供のように健康な、紅潮した頬をしているとつぶやく。ここには妹を慰め、励まそうとする気遣いという以上に、死にゆくものを美化し、聖化しようとする意識が働いている。

(6) (どうかきれいな頬をして／あたらしく天にうまれてくれ)

トシの死を覚悟した賢治が思わず、その美しい頬のまま、新しく生まれてくれと転生を祈る。この言葉はおそらく、トシの死出の旅を見送ろうとする賢治の無意識のうちに心の中に湧きあがった心の叫びであると共に、トシの死後もくり返し、くり返し、響き続ける重要なテーマとなっていく。

(7) (それでもからだくさえがべ？／うんにやいつかう)

原注には「それでもわるいにほひでしょう」とあるが、文字通りには「それでもからだはくさいでしょう」とい

うことである。「くさえ」の「え」は軽く発音されるので二拍である。「ゝがべ」の「ゝが」は質問の終助詞で、共通語の「か」は南部弁では濁音化する。「ゝべ」は推量の助動詞「べし」の「し」の脱落した形。「いでがえ」(痛いでしょう)「くるすがべ」(苦しいでしょう)「せづながべ」(切ないでしょう)など「ゝがべ」は相手の苦しみを思いやって同情する時、よく使われるやさしい言葉である。

トシは自分の体が病熱で、悪臭を発しているのではないかと恐れ、氣遣って母に再び尋ねる。母はそれに対して「うんにやいつかう」と強く否定する。賢治はこれに注を入れていないがもちろん「いいや、いつかう」ということである。『大言海』によれば「うんにや」は「いな(否)」の音便とされている。南部弁では同等以下の相手の言葉を親しみをこめて打ち消す時に用いられる。

(8) (ほんたうにそんなことはない／かへつてここはなつののはらの／ちいさな白い花の匂でいつぱいだから／ただわたくしはそれをいま言へないのだ)

母の言葉を受けて賢治も、心の中でトシの体が臭いなどということはない、それどころか「ここ」つまり臨終を迎えようとしている、今この場は、そのまま夏の野原のように、小さな白い花の匂で一杯なのだ、という。

賢治は浄土的世界を描くのに『光のすあし』では「夏の明方のやうないい匂でいつぱい」と喩えている。夏の野原の、明け方の白い花の匂でいつぱいの世界とは、賢治が自らの自然体験と宗教体験を融合させた詩的、文学的な浄土のイメージではないだろうか。『法華経』、ことに賢治が感銘を受け、その一節をしばしば引用もしている。「如来寿量品」によれば、仏は常住永遠なる存在であること、そして、そのみならず我々の住む世界がそのまま寂光浄土であるということが説かれている。もし賢治が確たる信仰をもっているなら(雨ニモマケズ手帳にみられ

るように）、仏の常住救済を信じ、そのことを妹にも告げて「安心」を与えることもできたであろう。あるいは、この苦しみに満ちた臨終の場も、そのまま浄土につながるものとして観想もできたであろう。しかし賢治はそうできなかった。そこまで信仰に徹しておらず、人間的な、修羅の境涯に在ることを認めざるをえなかった。それは常々、修羅の超克をめざし、精進を重ねていた賢治にとって重要な問題であり、これに続く一節「わたくしは修羅をあるいてゐるのだから」という言葉は、己れを突き刺す刃のように迫ってくる。

(9) (わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは／わたくしのふたつのころをみつめてゐるためだ)

賢治はここで自らの悲しみを直接述べず、トシの眼を通して、自らの悲しみを描き、その内面を告白している。即ち(トシから見て)自分が悲しそうな眼をしているのは、自分の心の中に「ふたつのころ」があるためなのだ。ここでいう悲しみはトシを失う悲しみではなく、自分の中であって二つに分裂する心、つまり、一方で高い理想、信仰に徹底したいと思いつつも、他方で人間的な修羅に生きる心に分裂する弱い心といってもよいだろう。これは詩「春と修羅」において「修羅の涙」と表現されたものと同じである。修羅であることに居座り、そこに安住すれば「悲しみ」はない。修羅を超えようとしながら現実には越えられない。そこに葛藤があり、「悲しみ」がある。信仰からくる高い理想を掲げながら、ともすれば現実に引きずられがちな弱い心があり、それを嘆くのである。詩の中の表現でいえば「巨きな信の力」から離れ、「純粹さ」や「徳」を失い、「精進の道」に背き、「修羅」のように生きている現実の自分、その自分の心を見つめる悲しさである。

(10) (ああそんなに／かなしく眼をそらしてはいけない)

賢治の悲しみは、同時にトシの悲しみともなる。トシは賢治の心を見抜いて、悲しみに思わず眼をそむける。その眼をそむけるトシに向かって賢治は「かなしく眼をそらしてはいけない」と心の中で叫ぶ。眼をそむける行為は、あきらめ、失望し、見放すことに他ならないからであろう。たとえ自分が修羅の道を歩んでいるにせよ、その悲しみに満ちた自分の眼、心をしっかり見てほしい、なぜなら、その「悲しみ」にこそあらたに立ち上がる力もあるからである。悲しみや悩みは同時に信仰を燃やすエネルギーともなる可能性を秘めているからである。賢治は眼による交流が断ち切られることを恐れてつぶやく。自分から目を離さないでほしい、自分を見つめてほしいと。信仰の道づれであったトシと賢治の心の交流が、眼差しの交流によって静かな無言劇となって展開している。

〈参考〉 トシの形象化をめぐる

板谷栄城氏は、「賢治の心の国にトシとテレジアが二重写しになっていた」のではないか(「賢治小景」二〇〇三年、朝日新聞連載)と指摘している。また「賢治と『小さき花』」(宮沢賢治研究 Annual Vol.7)において、賢治が『小さき花』の影響を受けていたことを指摘している。そこで、この点について少し立ち入って考察してみたい。詩「装景手記」には「聖女テレジア」の名が出ており、賢治がテレジアを知っていたことは明らかである。その一節を引用する。

「やまつつじ／何たる冴えぬその重い色素だ／赭土からでももらったような色の族／銀いろまたは無色の風と結婚せよ／なんぢが末の子らのため／その水際圏に／なぜわたくしは枝垂れの雪柳を植ゑるか／十三歳の聖女テレジ

アが／水いろの上着を着羊歯の花をたくさんもって／小さな円い唇でうたひながら／そこからこっちへでてくるために／わたくしはそこに雪柳を植える」

「装景手記」は花巻温泉南斜花壇の造園にかかわりの深い作品（ちくま文庫『宮沢賢治全集3』の解説。八沢康夫による）といわれているが、この一節は「やまつつじ」の色は「冴え」ない、「水際圏」―池のほとりには「雪柳」を植えよう、それは「聖女テレジア」が「小さな円い唇でうたひながら」登場するようにと願うからだ、というのである。「雪柳」が「聖女テレジア」の幻想を呼び起こすものとなっているわけである。もちろん賢治は、テレジアに心魅かれるものがあつたに違いない。

テレジアは一八七三年フランスに生まれ、両親が熱心なカトリック教徒であつたことから、その深い感化を受け（賢治・トシも浄土真宗の信仰厚い家に育つた）、十五歳でリジューのカルメル会修道院に入り、二十四歳の若さで肺結核のために亡くなった（トシと同じ年齢、同じ病気である）聖女である。その自叙伝は世界中に翻訳されたが、日本では『小さき花』として多くの人に親しまれた。賢治がトシを通じて、あるいはプジェ神父を通じてこの本を読んでいたことは間違いあるまい。同書は原題を「*Historie d'une ame*（ある靈魂の物語）」というが「*Historie d'une petite fleur blanche*（小さな白い花の物語）」とも自ら記している。「小さな白い花」はテレジア自身のことである。「装景手記」に出てくる「雪柳」は、それを具体的な花の名としてイメージしたものであろう。賢治の心の中で「永訣の朝」のトシは白い聖らかな「雪」となり、さらに、この「雪柳」へと変化していったとも考えられる。

「装景手記」に関連した散文作品に『花壇工作』がある。これは花巻共立病院の中庭の花壇を設計した折の体験に基づいて書かれたものだが、その一節に「南の診察室や手術室のある棟には十三歳の聖女テレジアといった風の見習ひの看護婦たちが行ったり来たりしてゐた」とある。「装景手記」の詩は、この散文が書かれた後、看護婦と

聖女テレジアが結びついて生まれた。この詩は、また、賢治の胸の中に、雪柳を植えることによって、この花壇を聖なる空間としたいという思いがあったことを示している。賢治にとって花壇を作ることも、その文学と同じように聖なるものを希求し、提示することであつたらしい。

「十三歳の聖女テレジア」といえば、ベネディクト修道院経営の学校で学んでおり、学業・品行共に全校生徒の模範といわれた。賢治は、看護婦たちの姿を見て聖女テレジアの姿を想像したようである（おそらくテレジアの写真を見ていたと思われる）。テレジアはその後カルメル会に入り、謙虚でつましく、目立たないようにしてその徳をみがき、自分が病弱で苦しんでいる時にもこにこして周りの人に親切な言葉をかけ、高遠な思索、精霊の照らしによる豊かな学識に恵まれた聖女として多くの人の心を捉えている。聖なるものへの深い憧れをもっていた賢治は、トシの中にテレジアに通うものを見、トシを形象化するにあたって、テレジアのイメージと重ねたのではあるまいか。トシも花巻川口小学校時代、成績抜群であり、その人柄、行動面においても「模範生」と呼ばれた。花巻高等女学校時代も級長を続け、平均点九五点を常時続けて、花巻中知らぬ者としてない評判の才媛であつたという。賢治はトシを誇りに思うと同時に、その四人の姉がすべて修道女となつたテレジアに、自分達を擬らえて考えることがあつたかもしれない。

「あいつはちやうどいまごろから／つめたい青銅ブロンズの病室で／透明薔薇の水に燃される」（「恋と病熱」と病熱に喘ぐトシが「透明薔薇」の比喻で描かれているが、それは単に熱で紅潮したことを薔薇に喩えたというのではなく、「聖なる花」というイメージが託されているようだ。「透明」あるいは「透きとおつた」という言葉を賢治は好んで使った。たとえば「あなたのすきとほつたほんたうのたべもの（『注文の多い料理店』序）「諸君はこの颯爽たる／諸君の未来圏から吹いて来る／透明な清潔な風を感じないか」（「生徒諸君に寄せる」）などという表現は、いずれも浄

化された、聖なるものという含みをもっている。童話『ひのきとひなげし』の初期形においても「黄薔薇」が「しづかさ、つつましき、安らかさ、けだかさ」といった徳を備えた聖なる花、天上の花としてシンボル化されている。

『小さき花』には、天国があることを宣言するために自分の血を最後の一滴まで流し尽くす覚悟でいること、かわいそうな無信仰者のために、自分自身は喜んで犠牲になる、などといったことが書かれている。これは、「永訣の朝」において雪（＝聖なるもの）を人々に届けるために、自らの幸福は犠牲にするという覚悟にも相通じる。

農学校教師時代、無題のまま活版印刷され、匿名で郵送されたり、手渡されたり、学校の下駄箱に入れられたりして配布されたという「手紙四」は、明らかにトシの死後をどう生きるかということがテーマになっている。その中で、幼くして亡くなったポーセ（明らかにトシを模して、トシを童女化して創られた創作人名である）を「ほんたうにかあいそうにおもふなら、大きな勇気を出してすべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。それはナモサダルマプフンダリカサストラといふものである」と書いているが、それはトシの死を契機として一層強められた己が宗教的使命感を表白するものではなからうか。

「ナモサダルマプフンダリカサストラ」とは、日蓮宗のお題目の「南無妙法蓮華経」を梵語の音で表記したもので、法華経に帰依します、という誓いの言葉である。これは、表面的には日蓮宗の信仰宣言とみられるが、盛岡中学時代のころから牧師や神父と交流をもち、トルストイやメーテルリンクなどを通してキリスト教についても深い知識をもっていた賢治の心の中に、諸宗教に共通する「聖なるもの」についての観念が育っていたようである。賢治は現実の教団としての「日蓮宗」に束縛されずに、法華経や仏教の根本的な教え、さらには宗教的な「聖なるもの」を、文学として形象化しようとしたのではあるまいか。

臨終詩編も「兜卒とそつの天」とか「精進しょうじん」「修羅」などという仏教語が使われていることから、仏教的な視点でのみ

捉えられがちだが、すでに述べたようにキリスト教、わけでもカトリックの強い影響がありそうである。己れの命、幸福を犠牲にしてもという祈りは、確かに『法華経』の中でも説かれているが、一般に仏教ではあまりこうした教えは強調されない。また仏教では女性の聖人がきわめて少ない。その点カトリックは多くの聖人女性を輩出している伝統もある。「セントジョバンニ」(「ひのきとひなげし」)即ち聖ヨハネを作品の中に登場させた賢治の幻想の物語の中で、生けるトシはテレジアとも重なり、聖なるものへと転化していったことはほぼ確かなことだと思われるのである。